

事例6

高校魅力化
×
地域活性化
クラスター

地域一丸となった 「高校魅力化」を軸に 新しい島づくりを進める

沖縄本島の西約100キロに位置する久米島は、琉球王朝時代には交易の拠点として栄えた歴史を持つ。現在、島全体が県立自然公園に指定され、多くの観光客がこの島を訪れる。しかし近年は人口減少が進み、かつて1万7000人を超えた人口も、現在は8000人を割る。そんな中、島唯一の高校である沖縄県立久米島高校が、地域の教育環境の充実と島の魅力化、新しい島づくりの拠点として機能している。

OECD日本イノベーション教育ネットワーク 高校魅力化×地域活性化クラスター プロフィール

OECDイノベーション教育ネットワークの主旨に賛同する学校・大学・NPO・自治体等が集まり、ISNや各学校の教育実践のノウハウや研究成果を共有するために組織化されたのがボランタリークラスター。久米島高校が参加する高校魅力化×地域活性化クラスターもその一つで、高校でのPBLやディープラーニングの授業を通じて、グローバルな視点を持ちつつ、地域の課題を地元民・外部人材を活用しながら発見・解決し、地域活性化を可能とする人材を育成する環境、カリキュラムを追究する。

町が一体となって 県立高校の魅力化を展開

久米島高校の魅力化事業がスタートしたきっかけは2009年、同校園芸科の整理統合（廃科）が沖縄県教育委員会から打診されたことだ。普通科2クラス、園芸科1クラスの合計3クラス、120人を1学年定員とする同校だが、当時すでに定員割れが続き、入学者数が80人程度であった。

久米島のような離島にとって、園芸科の廃科は単に一つの科がなくなるというだけには収まらないさまざまなデメリットをもたらす。例えば、生徒の進学の実績が減り、島外の高校に進学せざるをえない生徒が増えたり、基幹産業である農業の担い手不足を招いたりするおそれがある。また、教員数が減ることで履修できない科目が出てしまい、

高校として生徒の多様な希望進路に対応できなくなることも考えられる。そうして、島の教育力が低下することは、住民の一家転住を加速させ、さらなる人口減少につながりかねない。

地域の高校の問題を、島の将来を左右する問題と考えた島の人々は、行政、教育委員会、町商工会、地域住民有志などからそれぞれの立場を越えて集まり、「久米島高校の魅力化と発展を考える会」の発足へとつながった。

「地域の最高学府である高校は、島の未来の担い手を育てる場所として不可欠です。人を資源と考え、地域の産業を発展させる人材を、地域で育てる場所として、久米島高校をより魅力的な学校として存続させることが大切だと考えました」（久米島高校の魅力化と発展を考える会会長、久米島商工会会長 嘉手苺一さん）

「島の環境や魅力を活かし、久米島だからできる学びの場をつくることで、教育を軸にした地域振興をめざしました」（久米島町企画財政課 濱元尚哉さん）

園芸科の存続を求める署名運動や住民大会などにより、園芸科廃科は延期されることになった。だが、その後も久米島では「島の教育は島全体で応援する」という考えのもとで高校魅力化プロジェクトが進行している。

島で暮らし、学ぶ子どもたちに 多様な体験を

久米島の高校魅力化は、島根県海士町をはじめ全国各地で教育を通じた地域活性化に取り組む教育政策アドバ

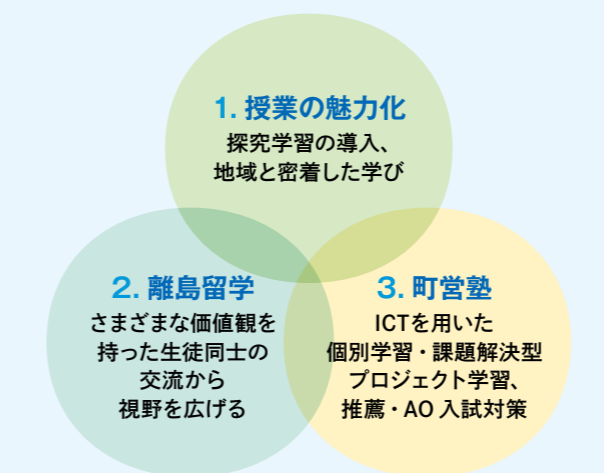
ザーの藤岡慎二氏のアドバイスをもとに大きく三つの柱で進められることになった。

一つ目の柱は授業の魅力化だ。久米島高校では「総合的な学習の時間」において、観光振興や雇用創出など島が抱えるさまざまな課題について、現場での体験を通じて原因と解決策を探究する「まちづくりプロジェクト」を行っている。

「これからの社会で求められる思考力、判断力、表現力を養う取り組みです。さらに、生徒は自分たちが生まれ育った地域の現状を学び、未来を考え、地域に対する関心を持

図 久米島高校魅力化の目的と、3つの柱

目的 島内外からの生徒数を増やし、園芸科を存続させて魅力ある高校づくり



島根県海士町の島根県立隠岐島前高校の高校魅力化プロジェクトを参考に、2013年には久米島町教育委員会に魅力化専属のスタッフを配置。上記の三つの柱での久米島高校の魅力化プロジェクトを開始した。



沖縄県立久米島高校
校長
前川守克
まえかわ・もりかつ



久米島町
企画財政課
班長
濱元尚哉
はまもと・なおや



久米島高校の魅力化と発展を考える会会長
久米島商工会会長
嘉手苺一
かてがる・はじめ

ち、自分にもできることがあることに気づくことによって、高校卒業後、進学などでいったん島を離れても、いつか地域に戻ってくる若者が増えることも期待されています」（久米島高校 前川守克校長）

二つ目の柱は、島外から入学生を募集する離島留学だ。久米島町の住民の家庭にホームステイする里親制度、そして2016年に完成した町営寮を併用しながら、高校一年生

地方創生における高校魅力化の意味

過去と現在を紐解くことで、 地域の未来をつくる教育が見える

久米島高校魅力化プロジェクト アドバイザー
株式会社 Prima Pinguino 代表取締役 藤岡慎二

教育はその地域の移住・定住に大きな影響を及ぼします。特に、久米島のような離島では、学校がなくなってしまうことで人口減少が加速することがしばしばです。

久米島高校園芸科の廃科問題が、久米島の将来を左右することに気がついた町の人々は、県立高校の問題であることは理解しつつ、当事者として関わっていきました。私はアドバイザーとして「久米島高校魅力化プロジェクト」に参加していますが、高校、町、商工会、町営塾、教育寮と高校魅力化の関係者がワーキンググループをつくり、お互いにアイデア

を出し合う関係ができています。そこには、島の外から参加した人もたくさんいます。しかし、メンバーに共通するのは、久米島の文化、歴史に敬意を払い、学び、それを礎にしてこれからの高校のあり方を考える態度です。こうしたスタンスが徹底されているからこそ、魅力化の作業に島のことを一番よく知り、島に愛情を注ぐ地域の人たちが参画できるのです。地域の過去と現在を認めて、未来に受け継ぎ直そうという魅力化でなければ、地域には受け入れられません。

地域が持てる資源を活用し、そこに住む子どもの成長に貢献したとき、子どもは地域に恩返しするのだと思います。地方創生を考えるなら、子どもの成長に地域が積極的に関わることが大切です。そして、地域の人に接し、課題を理解したとき、子どもたちは地域への当事者意識を持ち、大人にはない感性を武器に解決に取り組む続けようとするでしょう。



2016年4月にオープンした交流学習センター「じんぶん館」。県外から久米島高校に入学する生徒用の宿泊施設と、町営塾「久米島学習センター」を兼ね備えた施設だ。医療施設だった建物をリノベーションして使用している。

を対象に毎年10人程度の離島留学生を募集している。

「アジアの国々との中継貿易の拠点だった久米島には、異なる文化、価値観を受容するDNAが受け継がれています。離島留学も、単に子どもの数を増やそうというものではありません。島の子どもたちに多様な価値観と出会うことで、これからの社会で求められる協働する力、受容する力を身につけてもらうことが大きな目的なのです」(久米島商工会 嘉手苺さん)

改善し始めた 久米島高校の入学状況

三つ目の柱は、町営塾での個別学習指導だ。町営塾「久米島学習センター」(交流学习センター「じんぶん館」内に設置)では、授業の理解から大学進学までを目的とした学習指導、そして推薦・AO入試の出願、小論文対策を、専門スタッフが担当。放課後から21時まで生徒に学びの場を提供している。

さらに町営塾ではディスカッションなどを通じたゼミ形式の授業「ちゅらゼミ」を実施。生徒は、グループワークやプレゼンテーションを体験しながら、対話する力を身につけ、問題解決の方法などを学んでいる。

こうした高校魅力化の取り組みの影響もあって、久米島町内の中学校卒業生数が減少する中、島内からの久米島高校への入学率は着実に上昇している。

「2010年度には久米島高校への島内からの入学率は66%まで下がりましたが、魅力化事業が始まって80%を超えるようになりました。進学、就職いずれの進路を志望する生徒にも、離島にありながら多様な教育プログラムを提供することができているからでしょう。先日、島外の高校に進んだ久米島の若者が、『今の久米島高校だったら、僕は島に残ったかもしれません』と話してくれたのが印象的でした」(久米島高校 前川校長)

高校魅力化の成果が見え始めた中、久米島町企画財政課の濱元さんも「県立高校の魅力化に町が取り組む意義をさらに島の人々に伝え、小学校、中学校、そして高校が連

携しながら、『教育の島』としての魅力を高めていきたい」と展望を語る。

オンリーワンの地域企業を担う人材を 地域ぐるみで育てる

久米島高校魅力化事業嘱託員として高校、町役場、商工会、さらに離島留学を希望する島外の生徒とその家庭をつないでいく役割を担う山城ゆいさんは「久米島の高校魅力化は、異なる立場の人たちがお互いを認め合いながら進んでいこうとしている」と感じている。

「学校、行政、町とそれぞれ立場は異なるけれど、みんなにとって一番大切なものは子どもであり、同じなのだということがわかっているから、それぞれの立場をわかりあおうとしていると感じます。人を育てるといふ営みは、本来、経済活動等と異なり、利益が相反するものではないはずですから」

久米島高校園芸科の存続問題に端を発した久米島の取り



久米島高校魅力化事業嘱託員

山城ゆい

やましる・ゆい

組みだが、今、ハワイの高校への短期留学制度など、より広い視野での人材育成へと拡充している。しかし、それでも、「久米島だからこそ」の魅力化であることにこだわりたいと島の人々は考えている。

「海洋深層水の利活用や、牡蠣の陸上養殖など、久米島ではさまざまなチャレンジが行われています。今後は、実証実験の成果を生かし、新しい産業を創出するオンリーワンの企業がたくさん生まれるはず。そして、そこで働く有為な人材を地域の人たちが総がかりで育てることができれば、それは久米島全体の魅力化につながるはず」(久米島商工会 嘉手苺さん)

高校魅力化を支える2つの「場」

1 町営塾

教科学習と新しい学びで 地域を担う学力を育む

町営塾の久米島学習センターは、教育寮を併設する交流学习センター「じんぶん館」内にあり、寮に住む離島留学生はもちろん、地元の生徒たちも数多く通う。センターには専任講師が常駐し、大学進学対策から授業の補習、テスト対策など一人ひとりの進路や習熟度に合わせた個別指導と自立学習を行う。

「生徒一人ひとりと面談し、それぞれに合った学習プランを



進学を希望していなかった生徒が学習センターでの学びを通して志望を高く持つようになり、国立大学に合格するケースも出てきている。



久米島学習センター

塾長

山本愛美

やまもと・あいみ

生徒と一緒に考えます。そのため、一斉授業はほとんど行いません。推薦・AO入試の受験指導も行いますが、志望理由書の書き方を形式的に教えるだけでなく、志望が明らかになり始めた段階で、自己理解や卒業後の社会とのかかわりかた、大学研究など、時間をかけてじっくりとサポートします」(学習センター塾長 山本愛美さん)

学習センターには、大学受験に目的を絞って勉強にくる生徒もいれば、授業の予習・復習を済ませに来る生徒もいる。進学コースに所属する生徒ばかりではなく、就職や専門学校を視野に入れた生徒も多く通っている。

「ある保護者のかたから、『うちの子どもは家では全く勉強をしなかったが、学習センターに行くようになって、家でも教科書を開くようになり驚いている』と教えてもらったことがあります。勉強のスイッチが入ったのでしょうか」(山本さん)

学習センターでは、まちの基盤をつくり、地域に新しい風を吹き込む人材を育成するため、ゼミ形式の授業「ちゅらゼミ」も月1回行っている。これからの社会で求められる課題発見・解決能力を身につける新しい学びを、離島の高校生はこの学習センターで体験しているのだ。

2 教育寮

自分で考え、判断できる 次代のリーダーを育む

交流学习センターに併設される町営寮は、収容人数24人。「自分で探し、選び、決断する力を身につける」を基本理念に、生徒たちが話し合いで寮のルールを決めたり、イベントを企画運営したりする。常駐するハウスマスター2人は、寮母のように生活を見守り、また関わりの中で生徒の主体性を引き出す役割を担う。生徒たちも「寮は食べて寝るだけの場ではなく、仲間と語り合いながら人生を考えたり、一緒に行動する中でリーダーシップを身につける場所」と口を揃える。

「自分たちで考えて行動することが自分の成長につながっていると感じます。寮生活をみんなで話し合いながら形づくっていくのが楽しいです」(2年生 福林開さん)

「寮生活ではみんなと行事の企画や役割分担を検討し、やる気を高める方法をみんなで考えたりします。みんなと一緒に、アイデアを実現する力、周りを引っ張っていく力が身に付いた気がします」(1年生 大澤こみちさん)

地域の人たちとスポーツ、お祭りを楽しんだり、全国の大学生や高校生とスカイプなどを通じて交流したりと、離島の寮に暮らすことで高校生の世界はむしろ広がっているようだ。

「ここに来てからは、地域の行事にも積極的に参加するようになりました。実家にいたらたぶん面倒だといって参加しな



沖縄県立久米島高校 2年生

(東京都出身)

福林 開

ふくばやし・かい



沖縄県立久米島高校 1年生

(東京都出身)

大澤こみち

おおさわ・こみち



沖縄県立久米島高校 1年生

(千葉県出身)

黒瀬康次郎

くろせ・こうじろう

かったかもしれません。今までは接点がなかった年齢、立場の人たちと交流することで、自分の可能性が広がり、やってみようという気持ちが高まっている気がします」(1年生 黒瀬康次郎さん)

寮に入ると数か月もしないうちに生徒の顔にこれまでとは違う自信が見えるようになると周囲の大人たちは語る。寮での多様な出会いが生徒たちをたくましく育てているのだ。